

滿蒙
再認識
と
新國家論

特240
427

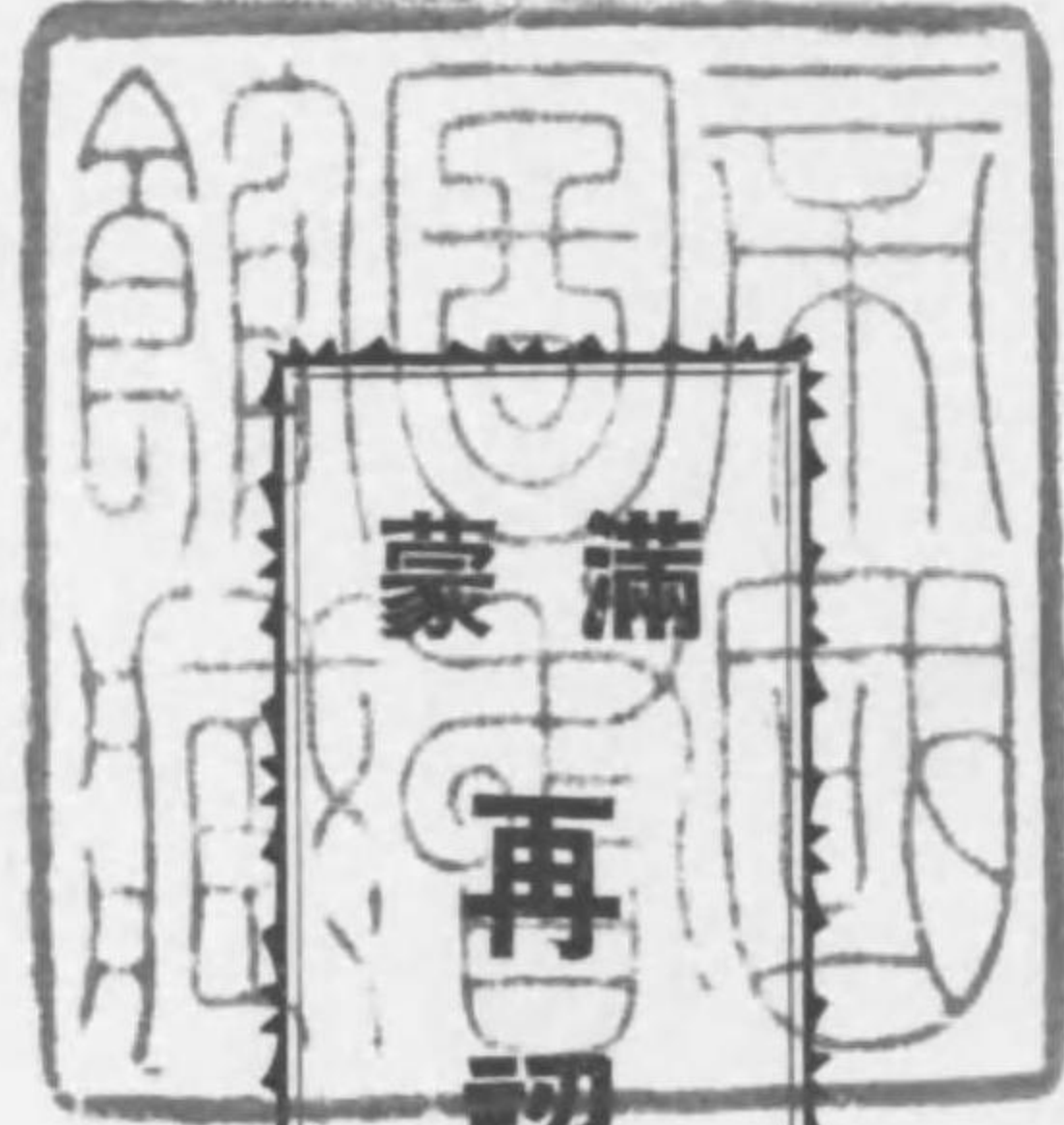
343
475



始



特240
427



蒙滿
再認識と新國家論



藤岡仁氏 寄

寄

滿蒙の再認識と新國家論 目次

十八、文	四三
十九、はしがき	三九
一、荒鷺の飛來	一
二、極東の天使	二
三、怪獸の暴逆	六
四、偉大なる直感	八
五、無限の資源	一六
六、開發の可能性	一三
七、海參の再吟味	一五
八、イデオロギ	一七

九、建設の前夜……………	二二
十、新獨立境……………	二三
十一、治 安……………	二四
十二、先づ幣制……………	二六
十三、融和の源……………	二七
十四、機械化と工業化……………	二九
十五、國策よ出直せ……………	三一
十六、西方を見よ……………	三五
十七、解決の鍵……………	三九
十八、文明北進と重大使命……………	四三
附録 滿蒙經營大綱……………	

はしがき

求心の世界か？遠心の世界か？先ず眼前に横はれる現實を正視せなければならぬ……………

黎明の滿蒙は今、輝かしい新國家誕生の前夜に立つて居る！

昨秋滿蒙事變勃發以來、滿蒙問題は全世界に異常なる衝動と反響とを與へ滿蒙は列國注目の焦點となつた。爾來幾多の紆餘曲折を経て今日に及んだが、今や滿蒙問題は獨り日本の興亡を制するのみならず全亞細亞の平和と安寧とを左右するに立ち至つた。斯る重大なる危機に直面して吾人は

より透徹したる認識と覇力を以て時局の拾收と大陸百年の大計樹立に向つて邁進しなければならぬ。

滿蒙問題は既に朝野の諸名士に依つて殆んど論じ盡くされたるが如き觀あるも未だ幾多の重要な點が或は見逃され、或は輕視され、甚だしきに至つては誤られたる認識の下に放置せらるゝものあるを深く遺憾とし此の際全く新しき視野と觀點とを以て滿蒙を正しく認識把握せざるべからざるを痛感し敢而淺學非才をも不顧、聊か所見を披瀝して江湖に訴えんとするものである、幸に御批判と御教示とを賜らんことを乞ふ。

一九三二、一、七、

著者

一、荒鷺の飛來

「北方禿たる山頂に野生せる一本の松あり、白き僧衣の如く雪を着て夢を見つ、

遙か砂漠の彼方太陽の出るところには熱き岩上に美しき椰子の樹繁茂せるを……………」と此の詩聖レルモンソフの一句を讀んだものは南光を憧憬するこゝ切なるロシアが、或はバルカンに或は印度に、悉く英國に其の熱圖を阻まれながら尙初志を離さず、遂に方向を東に轉じ彼のエルマークをしてシベリヤ遠征をなさしめ、近隣の東海國が未だ鎖國の夢圓らかなる時其の放てる荒鷺は既に極東に飛來して偶然にも幾多の豫期せざる資源の發見に歡喜し聽て是がロシ

ヤの彼の極東大計略の端緒を開きしを想起するであらう。茲に滿蒙問題の外的遠因を求め得ないであらうか。

二、極東の天使

世界歴史の教ふる限り日本は何國よりも平和に恵まれた國である。それは素より日本の歴史性に基因するのは勿論であるが日本の地理的關係に依據することも亦争はれない事實である。過去の日本は支那の文化を消化して兎も角も封建的安定を見出し得たのも其の爲である。

日本の持ち得た此の安定は然し決して永續的のものではなかつた。それは寧ろ鎖國孤立に於てのみ許されたる安定であり人々の自由抑制に依つてのみ得られたる謂はば消極的植物的安定に過ぎなかつたのだ。見よ、一度太平洋の彼方より吹き來つた嵐が開國と自由との警鐘を亂打せし時日本の孤立的安定が如何に脆く崩壊せし事よ。實に明治の大革新は日本の好むと好まざるとに不關封建の日本より自由の日本へ、即ち日本の日本より世界の日本として日本が全く新しき第一步を以て世界の舞台に登場したことを意味するのだ。

日本の此の門出は最も輝かしいものであつたが、然し其の立遅れの爲前途に幾多の難路を突破すべく運命づけられてゐたのである。滔々として流れ來れる彼の歐米の物質文明が素地と準備とを欠ける日本に浸潤したる時日本は異常なる努力に依り一時的的外形的には其の吸収と模倣とに成功したけれ共日本の

驚くべき所謂長足の進歩も其れは決して内面的成功を意味するものではなかつた。即ち日本の華々しき資本主義の成長も間もなく早熟早老に陥るの外なかつたのである。彼の日清、日露の両役後更に世界大戦を経て今日、日本の克ち得たものは何んであつたか、それは恵まれざる天然資源と狹隘なる土地に最近約六十余年間に約二倍に激増せる過剰人口を抱きつゝ、資本主義の行詰と共に是が国内的打開の道を見失ひて極度の苦悶を續けなければならぬ悲惨なる現状では無いか。單に人口問題に就而觀ても日本は從來多大の犠牲を拂ひ困難を排して南洋に或は南、北米に移民を試圖奨励したが何れも大なる成功を收め得なかつたではないか。假にそれが成功したとしても遠隔なる植民地が將來本國に取つて如何に頼み難きかは彼のチュルゴに聞く迄も無く嘗て植民地に據つて昇天の繁榮を見た大英國が今日植民地の興隆と離脱とに依つて如何に没落の悲哀

を味ふ苦境に立つてゐるかを觀れば自ら首肯し得らるゝところである。

今更日本の採りし鎖國政策を呪ふも愚ではあるが若し日本がより正しき認識と大なる經綸とを以て極東大陸に臨んでゐたとしたら恐らく今日の窮狀を見なかつたであらう。地理的に接壤し而して日本と深き歴史的關係を有する極東大陸こそ無限の天然資源を豊藏し、日本に依つて開發せらるゝを俟ち、日本に於て欠除せるもの、日本の需むるものを無限に提供し、従つて日本國民經濟の獨立と安定とを容易ならしめ、日本の更生を可能ならしむる唯一の天使である。是を世界の實狀に鑑みて考察するも日本は極東の天使無くしては救はれない必然的發展過程に在るのだ。

三、怪獸の暴逆

六

其の過去に於ても現在に於ても恐らく將來に於ても支那程複雑なる風貌を持つ國は無いであらう。一體それは何故であるかを知らんとするならば彼の四百餘州の廣大なる領土と四億數千萬に達する茫大なる人口と共に支那の歴史性の併考を忘れてはならないのだ。人或は支那を稱して大なる謎と呼ぶも未だ支那の全貌を表現し盡せるものではない。即ち其過去に於て幾多偉大なる文化を有し乍ら現在未だ蒙昧なる野蕃性を發揮して平然たる、或は表面不統一のなかに眠れるが如きも其の内面に包藏する經濟的潛勢力は他國を脅威し或は借望せしめ、一度、それが確たる國家主權の中心を欠き主權の離合集散常なき状態に

於て新興勢力となりて蠢動する時恐るべき狂暴なる形相と化する。支那は正に文明國家形態をなさざる不死身の一大怪獸である。

彼の世界大戰前の支那は國內不統一の缺陷と對外的無自覺とに乗せられた被略奪國であつた。今日世界の諸強國にして未だ全く支那を侵さなかつたのは米國以外には無いであらう。然るに支那は漸く自國の眞價を知り、彼のロシア革命に刺戟せられ、孫文の主唱せる三民主義が遂に勝利を博するに及んで、時宛も世界大戰の創疾を回復すべく舉つて東洋市場に殺到せる各國が何を慾求しつつあるかの状態を察して支那が對外的自覺をなすに至つて、全く其の面目を一新し、世界大戰後幾許も無くして被侵略國の汚名を清算して一路國權回收運動に向つて驀進し初めたのである。爾來支那は絶へず機會を狙つては猛烈に運動を續け剩へ其の間支那に利害關係を有する列國が各々支那の懷柔策として動

七

もすれば自國の利害に關せざる限り好んで支那の掩護的態度に出たので益々支那の乗するところとなり、國權回收運動は可速度的に強烈となり其の目的貫徹の前には手段を撰ばず、遂に條約上の正當なる權益をも蹂躪して顧ざるまでに立ち至つたのである。

四、偉大なる直感

地球全土の六分の一を占むるロシアの姿は世界地圖上の一偉觀である。一億數千萬の人口を有しロシアの如き單調なる國も亦稀であらう。

然しそれは必ずしもロシアの魯鈍を意味しない、何故なら若しロシアの遲鈍の外皮を一枚剝ぐならば、其處に偉大なる直感の閃を見るからである。此の直感を發しては嘗て彼の帝政ロシアの南下政策となり近くはソヴェートロシアの五個年計畫となつたのだ。即ち世界大戰に参加したロシアは戦ひ半ばにして彼の一九一七年の大革命となり、ソヴェート政權を確立してより以來今日世界に於ける独自の國家として存在を續け今や黙々として彼の五個年計畫の完成に向つて邁進しつゝあるのだ。

五個年計畫の主なる目的は全國民を動員し急速なるテンポを以て國內資源の開發を遂げんとするにある。ロシアが如斯一時對外進路策を中止して全力を傾倒し科學の力に據つて埋れる資源の開發の急務なるを直感し、是が實現にあらゆる努力を惜まざる點は全世界に對し一大暗示を與えつゝあるものと云ふべ

く、即ち大なる直感の前には些細なる利害と打算とを不顧、如何なる犠牲を拂ふごも目的の達成を期せんとするは正に頂門の一針である。ロシアが嘗て彼の曠漠として人跡稀なるシベリヤの大平原に極東政策を斷行すべく歐亞を連ねるシベリヤ大鐵道を敷設したのはそれである。目下世界各國が其の成功を危疑しながら尙驚異の目を見張つて其成行を注視せる五個年計畫も亦然りだ。

而してロシアが極東に於てもモスコーとの連絡統制の基に着々として極東五個年計畫を實行しつゝ、あるは日本に如何なる影響を及ぼすであらうかは大なる關心事ではなければならない。現に日本が彼の北洋漁業に於て或は北サハレンの石炭、石油等のコンシエツションに於てソヴェートロシアが如何に計畫的壓迫を加えつゝあるかを觀ても其の一端を窺ふに足るであらう。

以上述べ來つた如く世界大戰後世界に渦捲く暗流に泳ぐ極東諸國の斯る情

勢の推移は自ら極東の現在及將來の動靜を物語るものにして従つて滿蒙事變の近因も自ら其の中に孕まるゝに至つたものと云はなければならぬ。

憶ふに極東の資源は偶然の發見者たるロシアの獨占すべきものに非ず支那の蹂躪に委ぬべきものに非ずしてそれは當に極東の民族の爲に従つて世界人類の前に開發開放されなければならないのである。

五、無限の資源

極東の中心滿蒙は奉天省、吉林省、黑龍江省の全滿洲及び熱河省を含む東

蒙古一圓の總稱にして日本の約二倍の面積と約參千萬の人口とを有し、現に開發され而して將來開發され得る幾多の天然資源を持つことは茲に詳述する迄も無い事だ。例へば大豆、高粱、小麥、蕎麥、玉蜀黍、小豆、米等を初めとし麻、亞麻、煙草、甜菜、綿、果物等に至る迄此等の農作物は約二千五百萬町歩の廣大なる可耕面積中現在僅かに千三百萬町歩の既耕地に於て頗る多種多量に産出せられ其の輸出せらるゝものゝみにても年々數百萬噸を下らない。

羊毛、獸皮、毛皮、等の蓄産物並びに牛、馬、羊、豚、家禽等は牧草に富める大平原に放牧せらるゝもの實に數百萬頭に及ぶ。

木材、パルプ、燃料等の林産物は蓄積量約五拾有餘億石と推定せらるゝ、大森林より伐採せられ、

石炭、鐵、油頁岩等凡そ數億、數拾億噸の埋藏量を有する主要礦物より金、

曹達、石灰類、滑石、マグネサイト等其の他鹽、柞蠶に至る迄その豊富なること何れも無盡藏なるは既に各専門家に依つて紹介せられたところである。

六、開發の可能性

此等の天然資源を開發するに滿蒙は極めて有利なる地理的條件に恵まれてゐることは隣接に、溢るゝ根強き支那の勞働力と米作に特殊技能を有する朝鮮の農民を控ふることゝ共に、他方開發せられたる物資を必需する日本の必然的經濟發展過程の近在を擧ぐれば足るであらう。

即ち支那の勞働力が滿蒙の資源開發に極めて好適なることは、嘗てロシアの滿洲鐵道敷設に於て近くは日本の指導せる滿蒙土地の開墾と鑛山の發掘とに於て明かに立證せらるゝところである。次に日本が主なる原料を國外に仰がざるべからざる現狀に於て、人口並びに食料問題の國內的解決を期するは全く不可能にして若し強ひて是をなさんとすれば大なる冒險と不安とを伴ふ、即ち國內産業の進化合理化は失業者の暗流を益々擴大し國內産業の興張は海外市場競争の難路に日本を曝らす、それ故に日本民族の自然的發展性の行詰は、勢ひ其の經濟單位を最も可能性多き滿蒙に擴大して、彼の無限の富源の開發利用に依つて其の欠乏せるものを補ひ、更生の途を打開しなければならぬ必然的過程を横へると同時に、其過去の示す如く日本が滿蒙資源開發に優秀なる指導能力を有するのである。

七、海參の再吟味

今日地球上に劃されたる國境は恰も神によつて與へられたるものゝ如く其の神聖不可侵を主張せらるゝも、假令明確なる國境と雖もそれが民族發展の前に或は人類の生存上果して絶對的價値を有するものなりや否や民族興亡の跡を訪ぬれば大なる疑問に遭遇せざるを得ないのである。更に是を文明の將來と人類の理想と幸福とに照察する時如何に影薄きものなる哉敢而多言を要しないのである。其の明確なるもの既に然り、況や國境の未だ不明瞭なるものに於てをや。

滿蒙の獨立形態を見んには遠く一世紀を遡る迄もない。滿蒙は歴史的に永らく一獨立境として存在し來つたのである。従つて滿蒙に支那漢民族の入り來

つたのは極めて最近の事だ。即ち漢民族の大々の滿蒙への移住は彼の滿鐵が資源開發の勞働力を得んとして支那山東地方より多數の苦力の誘引を計つたことに其の端を發したので、今日滿蒙に居住する貳千數百萬の漢民族と雖も殆んど此の種の移民に外ならないのであつて其の數遙かに土着民を凌駕したが斯る滿蒙の支那化はそれ故に斷じて支那の自發的努力に依るのではないのである。

されば嘗て帝政ロシアが滿蒙侵略を企てたる際、若し日本が蹶起しなかつたとしたら滿蒙も亦、浦鹽が支那人に海參（浦鹽灣に海鼠多きが故に）と呼ばれ、元、北滿の一部にして今尙數萬の支那居留民を見る沿海州がロシアの魔手に奪はれたると同一の運命を辿りしならんこと必定にして、且つ日本が滿蒙開發の爲若し南方より支那移民を誘導せざるに於ては滿蒙に今日の如き支那化は見得なかつたと同時に、滿蒙の文化並びに産業の一大發展をも望め得なかつたであらう。

依是觀是滿蒙は歴史的にも政治的にも將亦、經濟的にも斷じて支那本國と同一視さるべきものに非ずして寧ろ單に支那と境を接し、一時的に支那色濃厚となりたる特殊地帯に過ぎないのである。

八、イデオロギ―

今回の滿蒙事變は因つて來たるところ素より遠く深しと雖も其の根源は日支兩國のイデオロギ―の相違に發するものと觀なければならぬ。即ち滿蒙に對する日支兩國の見解は其の根本的出發點に於て全然相反する對蹠をなすので

ある。

例へば支那は彼の國民黨の標榜する新興國家のイデオロギーを以て、滿蒙に於ける歴史性と日本の功績とを没却して、急激なる利權の回收を日本に迫り條約を無視して憚らない、反之日本はあく迄滿蒙の歴史性を主張して條約上の權益を擁護して譲らないのである。それ故に日支イデオロギーの根本的解消は日本が支那に有する權益を一物をも残さず支那に返附せざる限り容易に期待し得られないであらう。果して然らば其れが實行可能なりや否や、假に百歩を譲つて日本が支那にあらゆる既得權の返附を斷行したとすれば、そは日支兩國民に果して幸福を齎らすものなりや否や、日支兩國の現狀に照して暫く考察せなければならぬのである。

支那の民族的自覺と新興資本主義の擡頭が急激なる國權回收を要望するの

氣運漸次旺盛ならんとする情勢を早くも觀取せる支那軍閥は、宛も世界列強が支那市場の獲得と利權參加の野心を抱き舉つて阿諛親支的態度を採り來れるに乗じ、自ら打倒外國を唱導して自己の惡政に向けられんとする非難攻撃を巧に避けて、新興勢力を外に向かはしむるを對内政策とし、而して效果大なる列國操縱を對外政策としたのである。

斯くして内には許されたる武力或は財政等あらゆる獨裁的權力を亂用して苛劔誅求、大いに私腹を肥やし、互に勢力、地盤の爭奪を常として内亂を事とし外、一度巧妙なる外交に成功すれば益々増長して暴威を逞うし、果ては他國の正當なる條約上の權益をも侵害して不顧、甚だしきは純眞無垢の兒童に排外思想を教育鼓吹して愛國心に訴へ其の誤れるイデオロギーの普及に専念するに至つたのである。

若し支那の新興イデオロギイが眞に目醒めたる支那民衆に依つて正しく叫ばれたらんには、過去に苦き經驗を有する日本は彼等に理解と同情と而して援助とを惜まざるの雅量を有せざるべからざるも如斯き憎むべき軍閥に悪用せられ遂にそれが日、支、親善の毒素と化したる支那の現状に於ては、利權の返附は忽ち一部軍閥の手中に壟斷せられ一般民衆は是に依つて何等の餘慶にも與り得ざる結果となり、全く無意味に歸するのである。況や他方に今や滿蒙を生命線として死守せなければならぬ日本國民經濟の必然的發展過程の横はれるに於てをや、依是觀是、日本が支那に有する既得權益の返附は唯に日支兩國の現狀に於ては到底實行不可能なるのみならず、そは決して日支兩國民衆を幸福ならしむる所以でないことは自ら明かとなつた。

儒教が孔孟の生地たる支那に實行され得ずして却而傳授されたる日本に活

用せらるゝ一例に徴すれば日本は支那に返附すべきは支那の非望蜀望する權益に非ずして、寧ろ日本が長年月間に咀嚼體得せる實踐的支那文化であらねばならない。

換言すれば支那が自力に依り完全なる文明國家として統治せらるゝに至つてのみ、日本が安心して支那に權益の返還をなし得るのであるが、支那に其の日の來るを期待するは寔に日暮れて道尙遠しの感なきを得ないのだ。されば從來、共存共榮の前に隱忍、自重終始日支親善に心懸けたる日本の眞意は不幸にして毫も支那に理解せられざるのみならず、却而日本與し易しとの印象を支那に與へ、益々排日運動を激化して日本の正當なる條約上の權益をも覆へされんとする及び、日本は平和的手段を以てしては到底支那の反省を望み得ざるを悟り茲に自衛上止むなく實力の發動を見るに至つたのである。

九、建設の前夜

憶ふに日本の壓力に依つて滿蒙の治安を維持し、支那の勞働力を動員して滿蒙の資源開發に當らしめ普く門戸を世界に開放して利用するに彼の歐米の資本と科學とを以てせんか、そは獨り日、支、兩國民衆に繁榮と幸福とを齎らすのみならず聽て世界全人類に貢獻するところ頗る甚大なるものあらんと確心するのである。

日本は今、更生の前夜に立つて居る、百年の大陸政策を樹立し独自の經綸を行ふべく全力を集中して滿蒙に向はなければならぬ、其の爲には中、南支那市場に於ける一時的不利を覺悟しなければならぬであらう。一面列國の如

何なる干涉壓迫をも斥け、他面利權家の潛入を斷然排除して滿蒙新理想國の建設を待望しなければならぬのである。

同胞數萬の尊き犠牲に依つて贖はれ、投資されたる拾數億の巨資と異常なる苦心と努力とを以て築き上げたる滿蒙の權益の生殺興亡は、一に懸つて滿蒙新國家の雙肩にあるのだ。若し今日一步を誤らば將來に恐るべき禍根を遺す、されば今後時局の拾收と事變の跡始末こそ難中の難事と言はねばならぬ。

十、新獨立境

滿蒙を支那より分離して特殊獨立國を創設するは第一の急務である。

斯くして支那本國と政治關係を絶ちたる滿蒙新國家は、一方滿蒙全居住民に自由平等なる經濟的地位を與へて彼等の生存權を確立掩護すると共に他方資源を開發して彼等の厚生と福祉を圖り、滿蒙新樂土郷建設を以て其の國是とせなければならぬ。従つて滿蒙新國家と日本との關係は彼の商租權並びに鐵道問題等從來日支間に締結せられたる條約に基き新に協定さるべきである。

十一、治安

滿蒙新國家の治安は日本に依つて維持せられなければならない。

今後世界の情勢に如何なる變化を見るときも滿蒙の治安維持は獨り日本國家の存立上絶對的に必要なるのみならず、世界人類が日本に課したる重大なる任務とも言ふべく、日本無くしては滿蒙の樂土は勿論東洋の平和も斷じて望み得られないのである。それ故に日本は確乎たるモンロー主義の下に進んで新滿蒙國家の治安に任じなければならない。即ち日本の壓力は外、ロシヤの強壓と支那の擾亂とを排撃して滿蒙新國家の獨立安全を保持し、内、發達せる警察力と相俟つて匪賊、暴民を絶滅して新滿蒙國家の安寧秩序の維持に成功し得べきは彼の日清、日露の兩役並びに日本の朝鮮、臺灣等の新領統治が明かに實證するところである。就中匪賊、暴民の根絶を期するには、不逞の徒は素より斷乎として是を膺懲掃蕩すべきも順化の見込みあるものは大いに善導して正業に就か

しむる等根本的方策を講じなければならない。

即ち今日滿蒙に於ける匪賊、敗殘兵は勿論官兵と雖も殆んど教養無き無頼の徒にして、生活の根據を失ひたるに非ざれば、極めて薄弱なるものなる點に於ては皆同一なることを忘れてはならないのである。

十二、先づ幣制

新滿蒙國家は創立の第一步に於て先づ確固たる財政と幣制とを樹立して一面、滿蒙居住民の經濟的安定を圖ると共に他面、資源開發に資すべきである。

從來滿蒙に於ける財政及幣制は常に一部軍閥の魔手に獨占せられ、例へば不換紙幣を亂發し特産物の大買占を専行しては一舉に巨萬の富を作り、過重の税を課しては戰費の燃出を計り、或は不當關税を徵收しては外國商人を壓迫する等頗る亂脈紊亂を極め、是が爲重税と貨幣價値の動搖暴落とにより住民は絶えず其の生活を脅かされ塗炭の苦に喘ぎ來つたのである。試みに從來滿蒙に流通せる大洋票並びに官帖はその發行銀行實に十行を越え、極めて多種にして其の發行高に至つては未だ確たる統計をも見えざる程の多額に昇るのである。

十三、融和の源

今日滿蒙に於ける約參千萬の住民は大部分支那漢民族にして、恐らく今後と雖も滿蒙の平和境を求めて漢民族の移住は益々旺んとなるであらう。それ故に日本が眞に同文同種の隣邦民衆と握手して滿蒙新國家を理想境たらしめんと欲せば須らく漢民族の何者なる哉を理解すべきである、即ち或は其の歴史に遡り或は現在に即して是を學ばねばならないのである。

次に滿蒙に居住する漢、滿、蒙、日、鮮、露等の諸民族の親善融和を圖り共存共榮の實を擧げんには相互の理解を進むべく各種の文化的施設をなすは最も緊要である、凡そ文化的事業は寔に言ふに易く行ふに難いのは利益と打算とを超過せる偉大なる獻身的努力に依つてのみ始めて實現し得らるゝものだからである。斯る見地に於て滿蒙新國家は全住民の幸福と文化の向上とを期すべく或は完備せる教育機關を設立し或は一般民衆の社交、娛樂機關等の創設に力を

致さなければならぬ。

十四、機械化と工業化

埋れる天然資源を開發して利用厚生の途を開くべく滿蒙の一大電化、機械化及工業化を實現せなければならぬ。

即ち工業化に對しては滿蒙は其の内藏せる資源、原料の質と量とに於ては決して他に遜色するものに非ずして寧ろ勝れたる幾多の條件を具備して居る。例へば彼の豊富なる撫順の石炭、鞍山の鐵、並びに各種工業原料の産出と加之

低廉なる無限の支那勞働力を近くに控へるが故に其の施設の如何に依つては今後滿蒙に物理的並びに化學的工業の著しき飛躍を見るに至るであらうことは想像に難くないのである。

而して滿蒙の機械化及工業化は、一方に於ては必然的に人口の増加を招來すると同時に他方に於ては其の文化的水準を高め、従つて滿蒙が將來一大消費市場として日本に取つては極めて有望となるであらう。それ故に滿蒙の工業化を以て直ちに日本内地の工業を脅威するものなりと危懼する人々は一局を觀て全局を忘れたる偏狹なる觀察者にして如斯島國的偏見を揚棄せざる限り滿蒙開發の如き大事業の遂行は夢想だに望み難いのである。

殊に滿蒙の平坦なる無涯の沃野は大規模の農業の機械化に頗る好適有望なれば、日本が今後優秀なるアメリカの機械文明に、或は超アメリカを目指して

邁進しつゝあるソヴェートロシアに對抗せんとするには、先づ資本と技術とを先驅として滿蒙開發に當り、滿蒙の機械化、工業化の指導と統制の任を擔はなければならぬ。

十五、國策よ出直せ

遠き將來は兎も角日本と滿蒙とを連絡し、滿蒙開發の使命を果すに最も重要なる機關は鐵道であらねばならない。

然るに日本の滿蒙政策は從來殆んど一滿鐵のみに集中せられ、滿鐵のみを

通じて行はれ、遂に滿蒙即ち滿鐵、滿鐵即ち滿蒙であるかの如き奇觀を呈するに至つた。是こそ日本が對滿蒙政策に於て犯した最も大なる過誤であるのだ。

人或は滿鐵を單なる一營利會社と看做し、或は滿鐵總裁が政黨政府に依つて任免せらるゝを指摘し、滿鐵が黨利と營利との以外には何等の國策をも逐行し得ざる所以を説くも、其は未だ皮相なる觀察たることを免れないのである。何んとならば、それは滿鐵そのもの、創設に關する根本的討論を経ずして直ちに全滿鐵を論せんとするが故であるから……抑々滿鐵は今より約參拾年前帝政ロシアが彼の極東政略實現の目的を以て建設せしものにして従つて、滿鐵幹線の設計には日本は全然關與せざりしは勿論、日露戰役の結果滿鐵幹線が偶然日本の手に落ち、爾來日本が單に其の經營を擔當し來つたに過ぎなかつたのである。されば嘗てロシアが、ロシア独自の立場より利用せんとして建設

したる滿鐵其のものを唯一の基礎として、日本がロシアと全く異なる日本独自の國策を達成せんことを期するは宛も木に縁りて魚を求むるに等しく笑止千萬の沙汰と云はなければならぬ。試に見よ、從來日本が漫然として一滿鐵萬能主義を固執して一步も出で無かつた爲或は東支鐵道、ウスリー鐵道の競争に遭ひ、北滿の貨物をロシアに奪はれては狼狽し、或は輓近敷設せられたる並行線に依つて支那より致命的脅威を受けては殆んど爲す所を知らざる如き醜態を演じ來つたではないか。然し乍ら此等は必ずしも一滿鐵のみの罪ではなく、寧ろ永らく鎖國封建の島國的生活に慣れたる日本が何等独自の抱負經綸を持たずして、唯漫然と極東大陸に踏み込んだ無定見を暴露せる一事證に外ならないのだ。次に今日滿鐵のみに依つて全滿蒙の開發を望むは全く不可能なる第二の點を擧げなければならぬ。等しく滿蒙と云ふも南滿と北滿とは頗る事情を異に

してゐる。即ち南滿に於ける主なる資源は殆ど滿鐵に依つて開發の手を染められ、農業適地の如きも大部分耕作せらるゝ状態であるが、北滿に至つては今尙斧鉞入らざる大森林、鶴嘴加はらざる豊饒、或は未だ犁鋤を見ざる千里の沃野等幾多の開拓、開懇の餘地を残せる現状にして、滿鐵は其の不利なる地理的條件の爲に此等北滿の資源開發に充分なる機能を發揮し得ないのである。

於茲、日本は過去の不統一と無力とに鑑み、此の際所謂滿洲四頭政治を清算して、強固なる國家統制の下に、独自の國策遂行上、新なる經綸を以て滿蒙に出直すべきだ。即ち日本海を横斷して滿蒙の心臟と日本のそれとを貫く交通路として滿蒙の中部を東西に走る一大幹線の敷設こそ急務中の急務と云はねばならない。吉會鐵道はそれである。即ち吉會鐵道を楨幹として、是より支線及培養線を放射して滿蒙中北部の開發に當らしめると同時に、北鮮に良港を需め

て是が門戸とし、中北滿蒙の貨物を日本に向つて流出せしむるのである。斯くして吉會鐵道は獨り滿鐵の欠陥を補ひてロシヤの競争に備ふるのみならず、國防上極めて重要な位置を占むるものである。

十六、西方を見よ

開國の警鐘に鎖國の夢を破られたる日本は遂に太平洋岸の窓を開け放ち、素晴らしい勢で彼の歐米の物質文明を吸収して成長したが、間もなく早老の行詰に逢着せざるを得なかつた。而して日本の窮狀は、刻下の世界的不況に依り一

層深刻化したと雖も、日本の持つ國內的缺陷と矛盾との爲に日本特殊の暗影を翳すものである。

實に日本は今興亡の岐路に立つて居る。太陽が既に東窓を去つた今日、日本が若し更生の光を求めんと欲せば、須らく久しく鎖されて顧られなかつた西窓を開け放たなければならぬ。

見よ、日本海の清波を隔て、遙か彼方に紅に染むる滿蒙の天地を、そは眠れる日本海岸民をして草原地下の英靈と歴史に輝く先人を想起せしめ彼等を感じさせないであらうか。日本の更生は日本を轉換し、日本海岸民の奮起に俟たなければならぬ。先に貿易の先驅者錢屋五兵衛を出し、後に人煙稀なる嚴寒の地に草を分け北海道開拓に成功せる日本海岸人は克く艱難に耐え、開發事業に幾多の長所を持つてゐる。それ故に若し彼等が正しき認識を以て統制ある組

織の下に糾合して滿蒙に向ひ、或は今後日本海岸一帯の適地に對滿蒙産業の振興を圖りたらんには、必ずや前人未到の境地を創出するに至るであらう。惜むらくは從來滿蒙は殆ど真相を傳ふる者なく、多くの出征軍人に依つて酷寒と匪賊のみを紹介せられ、到底日本人の居住に堪えざる湖北の蕃地とせられ、例へば嘗て北滿松花江畔の草芒の一寒村に過ぎざりしハルビンが近々三拾年を出でずして人口約四拾萬の近代都市に膨張したるが如く設備の如何に依つては寒氣も凌ぎ易く、或は夏季強烈なる太陽の熱量は良く五穀を豊饒し且又日本内地にては味ひ得ざる裕然たる大陸生活ある等平和的方面の紹介は全然閑却せられたる結果、斯る誤れる先入主が禍して從來殆ど滿蒙發展を志す者を見なかつたのである。如斯現象は日本全國に於て觀られ、偶々九州地方の如く比較的海外發展熱の旺盛なる地方に於ても何等永住の目的を有せずして一攫千金を夢想す

るに非ざれば單なる冒險的野心を満さんが爲に渡満するもの多く、功を急いで
は結局流轉の道を辿る者がなくなつた。然しながら少くとも今後に行ける日本
の滿蒙發展は斯る舊套を脱して全く新しき理想と確信との下に行はれなければ
ならないのである。

從來日本の植民的失敗は、單に優秀なる人物を海外に誘導するを怠つたば
かりで無く移民に殆ど何等の準備も與へずして直ちに異境に送りたる事等全く
統制を欠きたるは素より重要な原因なりと雖も、植民地に於て日本人の満足
し得る休養、娛樂、修養其他社交機關等の公衆的施設を爲すを等閑に附した
るに基因するも亦争はれざる事實にして、是が爲移民は次第に品性粗野となり
、甚しきは自暴自棄となつて遂に雄圖空しく落伍の運命を辿るに至るのである
。斯る方面は一見些細なる事として看過され勝なるも、海外に於ける經濟的覇

力に乏しき日本國民性の缺点と共に日本の將來に取つて頗る重大なる意味を有
するものである。

十七、解決の鍵

今や世界は嘗て見ざる混沌たる形相を以て暗膽の淵に轉落しつゝある。而
して世界各國の今日の行詰は、其の端緒を等しく彼の世界大戰に發し各國特殊
の内面性を持つが故に、或は國家資本主義的傾向に於て、或は國家社會主義的
傾向の下に、各國各々窮狀打開にあらゆる努力を傾倒しつゝあるにも不拘、不

況は依然深刻化して宛も泥濘に墜ちたる駄馬の如く腕きつゝあるは何故であるか？そは各國の犯せる大なる錯覺と過誤とに基因するものと言はなければならぬ。

されば各國が眞に平和と幸福とを庶圖して現在の苦境を越脱せんと欲せば須らく國境に對する謬見と人種的偏見とを抛擲して、普く土地の開放を實行して民族の暢達を圖らなければならない。單なる利己的人爲策は徒らに國境の繩張を嚴にし、或は關稅の牆壁を高め、或は弱者を強制する等あらゆる排他的政策に墮し、結局自縛自縛に陥るに過ずして如何に無力愚劣であるかは現に世界各國の體驗しつゝある苦況が明かにこれを物語るところである。

凡そ國際關係に於て無理解と認識不足程恐るべきものはないであらう。そは事實の眞相を正視し得ずして正しき判斷を奪ひ理非曲直を顛倒して責むべき

を責めずして責むべからざるを責め或は和すべきを争はしめ甚だしきは善隣の同文同種の民族をして流血の慘を見るの悲むべき事態を惹起するに至らしむるのである。されど吾人は茲に何人も欺き得ざる現實と干すべからざる正義の嚴存することを忘れてはならないのだ。今回滿蒙事變に際し、彼の國際聯盟が全然正しき認識を欠いて強國の現状維持主義にリードせられ、支那の卑怯なる依頼心を助長して却而問題の解決を遅延紛糾化したる如き行動に終始したてはなにか。ドイツを恐れ、東洋に於ける利權の喪失を憂ふるフランス然り、印度の獨立を恐れ、私かに支那中南市場の奪回を企圖せる英國、並びに支那に利權參加を覬覦するアメリカ等皆然り、爾余の聯盟諸國と雖も世界平和と正義の名に隠れて殆ど自國の利害を先にし、全く自國あつて他國なきが如き態度を採つたではないか。

世界の趨勢に照應すれば日本は今日列國の武力干涉並びに經濟封鎖の脅威を受くるものは直ちに想像し得られざるも、滿蒙問題解決の裏面に全支那問題解決の鍵が秘さるゝものなるを洞察し、前途に幾多の難關の横はれることを覺悟しなければならぬ。即ち西に後進農業國より一躍先進工業國たらんとして全力を擧げて五個年計畫に奮闘しつゝあるロシア在り東に世界第一位の機械文明國を以て自他共に許すアメリカの勁物として世界霸業を企劃せるあり而して南方には今や必死の努力を以て其の没落運命を挽回せんと窺機せる英國ある等、此等の諸國は常に極東に大なる關心を抱き、絶えず日本の行動の監視を怠らないのである。

然れ共今回正當なる滿蒙の權益全く危殆に類するに及んで自衛上止むなく實力を發動するに至つた日本は、素より滿蒙に何等の領土的野心をも有せざる

は勿論、滿蒙の門戶開放を標榜して滿蒙に平和と安寧との新理想境建設を待望して、彼の暴戻なる支那軍閥の魔手より滿蒙を救はねばならないと同時に日本の背後には虐げられたる拾億のアジャ民族ありて、日本の進退は直ちに此等新興民族の興亡に大なる反響を及ぼすものなるを自覺し、責任の極めて重且つ大なるを知らねばならない。

十八、文明北進と重大使命

極東は實に遺されたる世界資源の中、第一位的價値を有するものである。

凡そ必然的運命の前には如何なる困難と雖も克服され得るものなることは、彼のメーフラワー號の移民に創まる北米の發展史を繙くまでも無く、今より數千年前彼の南方チグリス、ユーフラテス及びエジプトに發祥せる文明が爾來天然自然との鬭争と天然資源の開發に依つて次第に北上して、彼のギリシヤ、ローマに燦爛たる文化の華を開き、更に北進して現今歐米の都市文明となり、今や北緯四、五十度の地に其の中心を移すに至つたことによつて自ら實証せらるゝのである。試みに近代文化の代表的大都市たる紐育、巴里、倫敦より伯林を経て遙かに北歐に至らんか、彼のロシヤのレニングラードの如き實に北緯六十度の朔北の天地に人口百萬の文化的大都會を營みつゝ、ある事實を見るであらう。素より緯度必ずしも人類の適任を示す標準に非らずと雖も、如斯文明變遷移動の跡を訪ねれば、極東大陸の資源開發は、獨り世界文明が國境を超越して極東

民族に興へし偉大なる任務なるのみならず、日本の必然的行詰を打開して更生の途に向はしむるものなりと謂ふべく、斯くて今や黎明の前に立つ日本は其の前途に大なる光明と確乎たる信念と誇りを以て洋々として此の一大使命の達成に向つて進まなければならぬのである。

(完)

終

